

中国の苦悩と光明

異例の十全大会は何を意味するか

八月二十四日から二十八日まで北京でひそかに開催されていた中国共産党第十回全国代表大会は、中国共産党史上にも前例のない特異な大会であった。五日間という短期間のうちに終わり、その事実が事後公表されたこと自体、今日の中国共産党のかかえる問題の複雑さを示唆しているとも見られなくはないが、何よりも注目すべきことは、内には文化大革命から林彪事件を経、外には米中接近から中国の国連復帰、日中国交という大きな内外情勢の変化のなかで中国が当面する諸課題を理論的にも全面的に総括し、さまざまな角度から当面の諸問題を再検討するという党全国代表大会の本来的姿からは大きく乖離していたことである。

八月二十四日から二十八日まで北京でひそかに開催されていた中国共産党第十回全国代表大会は、中国共産党史上にも前例のない特異な大会であった。五日間という短期間のうちに終わり、その事実が事後公表されたこと自体、今日の中国共産党のかかえる問題の複雑さを示唆しているとも見られなくはないが、何よりも注目すべきことは、内には文化大革命から林彪事件を経、外には米中接近から中国の国連復帰、日中国交という大きな内外情勢の変化のなかで中国が当面する諸課題を理論的にも全面的に総括し、さまざまな角度から当面の諸問題を再検討するという党全国代表大会の本来的姿からは大きく乖離していたことである。

「批林整風」に終始

公表された新聞公報、周恩来政治報告、新党規約と王洪文新副主席による党規約改正報告を読んだかぎりでの私の全般的な感想は以上のようなものであり、全党的な團結による余裕のある党大会の実現というよりは、今日の中国共産党が直面する苦悩がより多く散見されたのであった。第四次五カ年計画をはじめとする経済建設の現状と将来の方向について今次党大会がまったく検討を加えていないことも、このような観察を根拠づけるであろう。

の課題であった林彪事件に関しては、「林彪反党集団」との闘争がいかに激烈なものであったか、この事件がいかに深刻な傷跡を党内に刻み込んだものであったかがまざまざと示されたのであった。「批修整風」をあえてあからさまに「批林整風」と呼びかえ、林彪および「林彪反党集団の主要メンバー」陳伯達を最も厳しい形容詞によって断罪し、その罪状を数十年以前に遡って糾弾しているその有様は、まさに林彪が先の九全大会で劉少奇を糾弾した有様と軌を一にするだけに、われわれの緊張を誘うにも十分であった。

公表された新聞公報、周恩来政治報告、新党規約と王洪文新副主席による党規約改正報告を読んだかぎりでの私の全般的な感想は以上のようなものであり、全党的な團結による余裕のある党大会の実現というよりは、今日の中国共産党が直面する苦悩がより多く散見されたのであった。第四次五カ年計画をはじめとする経済建設の現状と将来の方向について今次党大会がまったく検討を加えていないことも、このような観察を根拠づけるであろう。

だが、ここで第二に指摘すべき問題点は、このような林彪批判や対ソ非難の激しきにもかかわらず、言葉のうえで激しさが増せば増すほど、問題の核心はこの点にのみあるのではなく、林彪批判や対ソ非難は全党がいまこの点では一致し得る敵愾心の集約であって、まさに全党が「怒りをこめて林彪反党集団の罪悪行為を糾弾」し「ソ修社会帝国主義」の「不意の襲撃に高度の警戒心を保つ」ことによってこそ、いまだ流動的な情勢にある党内の政治状況を調整し凍結しようとしたものだと思われることで

つまり今大会は、林彪批判ならびに對ソ批判を全党あげて行った壮烈な一大儀式の観を呈したのであり、九全大会路線から林彪色を一掃し、林彪事件以来の最高指導部

それだけに、今回の十全大会については依然としてナゾが多く残っており、今後の展開をまけて分析すべき問題点が数多く存在するが、まず第一に、今次党大会の第一

ある。七一年九月の林彪事件以後も「人民日報」や「紅旗」などの公式論のなかにさえ八対二もしくは七対三程度の割合で読みとれる穏健派と急進派の対立や、いわゆる「周恩来路線」への批判と思われる論調も継続してきていただけに、これまでの経過からしても、十全大会が党内の問題を完全に解決したとは思われないのである。

王洪文NO・3説は疑問

第三の問題点は当然、新しいリーダーシッブの形成に關してであろう。今回の大会で政治報告を行った周恩来は、誰が見てもNO・2の地位にあることは明らかだが、制度的にはあくまでも集団指導体制をとることによって、劉少奇や林彪のケースに見られた権力の派閥的な集中と運用を極力避けようとし、同時に世界を驚かせた新人・王洪文や張春橋、李德生といった中堅幹部を政治権力の中核に抜擢・登用して全党的にも「老・壯・青」の団結をはかり、中国の将来にそなえたのであった。もとより、ここには後継者問題がもたらした教訓を活かした中国首脳の並々ならぬ人事構想と將來へ向けての光明とがうかがえよう。

しかし私自身は、巷間はやされている王洪文NO・3説にも疑問をいだいており、十全体制とは要するに「毛沢東以後」の時代を中国の指導層自身がそれぞれさまざまな角度から意識して形成した過渡的な政治権力体制だと考えている。確かに王洪文は中央委員から副主席に抜擢され、党規約改正報告という大役を演じたが、ある意味では他の指導者がこの役を演ずることがもたらす決定的な意味あいを避けるための人事だとも思われ、むしろ党副主席には選ばれなかつたといえ、党大会秘書長（九全大会では周恩来が担当）をつとめた張春橋政治局常務委員の着実な成長により多く注目すべきではなからうか。

いずれにせよ、王洪文にしても張春橋にしても、ともに上海出身の「文革グループ」ではあるが、江青、姚文元の明らかな地位低下に比して、彼らは実務派の党官僚、軍官僚とも連携し得る幅の広い基盤で成長しようとしているようであり、したがって十全大会が「文革グループ」の躍進をもたらしたとは決していえないのである。この点に關連しては、今回、政治局入りはしなかつたとはいえ、大会直前にはウランフ、譚震

林といった旧実権派の領袖が鄧小平同様に復権し、今大会では李井泉、李葆華といった地方に根をもつ旧実権派幹部が再び中央委員に復帰した事実注目しておくべきであろう。

最後に、おそらく議論の分かれる点は周恩来副主席の政治的地位に關してである。

今日の中国が「周恩来路線」を歩みつつあることについては疑いないにしても、今回の政治報告を見るかぎり、周恩来が常に決定的に状況を動かし得ているのかどうかについては、まだまだ疑問が残るような気がする。彼の報告にはどこか余裕に欠けるものがあり、林彪や陳伯達が「生産を發展させること」を九全大会以後の任務にしようとしたとしてこれを激しく批判し、あえて「革命主義」を強調している彼の姿に、私は、文革初期に見られた周恩来の動揺から毛主席に対する忠誠への急転換の時期に見られた彼の姿を想い起こさざるを得なかつた。あるいは、この点をも含めて周恩来の遠大な政治構想と卓越した政治力を読みとるべきであるのかもしれないが、いまだ早急な結論が下せないように思われる。

《中嶋領雄》



エスカレートした中ソ論争

四年前より回数ふえる

符合をみせている。

姪外相訪欧のころから

中国共産党十全大会に關して八月二十九日発表された新聞公報の中には「われわれは帝國主義、とりわけ社会帝國主義の奇襲攻撃に警戒しなければならぬ」と強調している個所がある。社会帝國主義とはソ連のことであるのはいうまでもない。従来「北方からの脅威」といわれていたものが、さらに具体的な表現となつたわけである。

この「社会帝國主義の奇襲」で思ひ起こされるのが八月九日付の英紙「デーリー・テレグラフ」の記事である。これによれば、最近ソ連からある秘密文書が西ドイツの旅行者を通じて持ち出されたが、それにはソ連參謀本部が中国に対する大量核攻撃を伴う「電撃作戦」を検討中であると書かれているという。この秘密文書が真実を指摘しているかどうか確かめるすべはないが、十全大会の新聞発表の「奇襲攻撃」と不気味な

実際に晴天のへきれきのような事態が起るかどうか予測できない

が、中ソ間の最近の非難合戦は四年前の春と夏の国境武力衝突事件前後と変わらないくらい、いや回数の中ではむしろ多いのではないかと思われるくらいに激しさである。双方とも、互いに相手をベンで非難攻撃するのは別段珍しいことでなくなつて

いるが、最近それが急にエスカレートし始めたのは、ソ連側では五月の姫鵬飛中国外相の訪欧のころからで、ブレジネフ書記長のアメリカ訪問、全欧安保・協力會議第一ラウンドの外相會議、そしてソ連・東ヨーロッパ首脳クリミア會議にかけて次第に北京非難の度合いが強まった。田中訪ソに照準を当てたアジア集団安保構想に關するソ連首脳の発言や

新聞論調にも、氣迫がみなぎっている。

いちいち枚挙にいとまはないが、

七月十六日タス論評、八月七日のブラウダ紙アレクサンドロフ論文、十五日のカザフ共和国でのブレジネフ演説、さらには十六日のタス、二十日のイズベスチャ紙、二十四日のブラウダ、イズベスチャ、ソビエツカヤ・ロシア各紙、「新時代」誌、二十五日の赤星紙、月刊誌コムニスト八月第一二号など、いずれも中国の内外政策、とりわけヨーロッパ外交、核軍縮、第三世界に対する政策など中国の外交路線に激しい非難を浴びせている。つまり中国の外交は、反ソと反社会主義を振りかざして、霸權主義をむき出しにしているというのである。そして、日ソ間懸案の北方領土問題に關して北京は「日本の報復主義者と結んで不当な要求をおりたてている」と断じている。

中国の孤立化図る

このような対中非難の総ざらいを

世界ニュース

8月24日～30日

国際関係

七四〇七五年国連予算案「ワルトハイム国連事務総長は二十四日、総額五億一三四万ドルの一九七四～七五年国連予算案を提示した。前年度予算と比べ一九％の増加になる。国連・海洋平和利用委が閉幕」さる七月二日からジュネーブで開かれていた第六回国連拡大海底平和利用委員会は二十四日、この秋の国連総会に提出する報告書をまとめて約八週間にわたる日程を終え閉幕した。国連総長、中東歴訪へ「ワルトハイム国連事務総長は二週間にわたって中東を現地視察するため二十五日、ニューヨークを出発した。UNCURK解体を提案か「国連朝鮮統一復興委員会(UNCURK)は二十九、三十の二日間ソウルで全体會議を開き、今秋の国連総会に提出する年次報告書をまとめた。内容は公表されていないがUNCURKの活動停止または解体については「国連決議案に従う」旨の宣言が盛り込まれていると観測されている。

対日関係

日韓會議延期を発表「日韓兩國政